

▶ 解説

(16): 4 [正解率: 59.4%]

仏教寺院は、本尊を安置する金堂（本堂・仏堂）、仏舍利（釈迦の遺骨）を納める仏塔、説法や法会を行う講堂などの建物で構成される。これらの並びを伽藍配置といい、時代や宗派によって異なる。4は薬師寺式。薬師寺は、天武天皇の命で698年、藤原京に完成。のちに平城遷都に伴い奈良に移転した。1は法隆寺式。607年に、聖徳太子が斑鳩宮のそばに創建した法隆寺の西院の伽藍配置。塔と金堂が1と左右逆の2は法起寺式。法起寺は、山背大兄王が聖徳太子の岡本宮を寺として638年に創建。3は四天王寺式。593年に聖徳太子が創建した日本最初の仏教寺院と伝えられる。

▶ 問題 17

●「厳島神社」の大きな特色の一つに、寝殿造りが挙げられる。貴族の住宅様式を神社建築に取り入れた大胆さは、平清盛ならではの発想と言える。神社建築に住宅様式が取り入れられたように、異文化の価値観が交流したことを表す登録基準と、寝殿造りの特色を表した文章の組み合わせで、正しいものはどれか。[3点]

- (17): 1. (i)=室内に床の間を持つ
 2. (ii)=渡殿(廊下)で建物をつなぐ
 3. (iii)=室内に床の間を持つ
 4. (iv)=渡殿(廊下)で建物をつなぐ

▶ 解説

(17): 2 [正解率: 71.3%]

厳島神社の登録基準は(i)(ii)(iv)(vi)。設問の「異文化の価値観が交流したことを表す」は(ii)に該当する。寝殿造りは、平安時代の貴族の住宅の建築様式。寝殿という建物を中心として、その東、西、北に配した対屋を渡殿(廊下)でつないでいるのが特徴。「室内に床の間を持つ」のは、書院造りの特徴。室町時代中期に成立した、武家住宅の様式である。

▶ 問題 18

●「日光の社寺」は、2社1寺で構成される。2社とは東照宮と二荒山神社であるが、東照宮が「権現造り」、二荒山神社が「八棟造り」と建築様式が異なる。権現造りと八棟造りの関係を表す説明文で、正しいものはどれか。[3点]

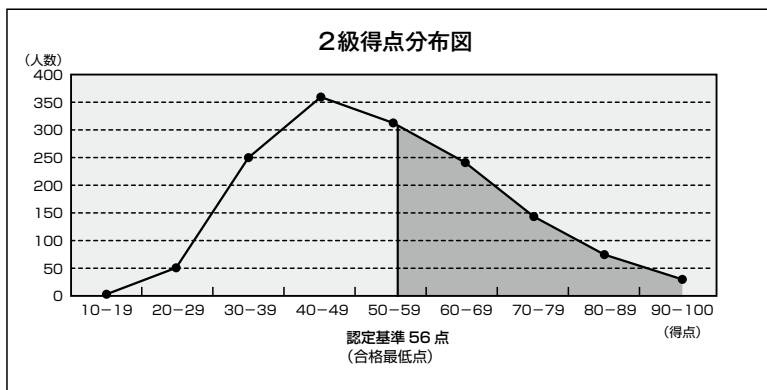
- (18): 1. どちらも「相の間(石の間)」で本殿と拝殿をつないでいることで、八棟造りがのちに権現造りに発展したと考えられる
 2. 八棟造りは、日光地方に昔から伝わる様式で、権現造りは江戸から持ち込まれたため関係はない
 3. 権現造りを発展させたものが八棟造りで、屋根の形に類似点を見ることができる
 4. 二荒山神社は山岳信仰の中心地、東照宮は人物神であり、完全に別の建築様式である

▶ 解説

(18): 1 [正解率: 58.2%]

拝殿と本殿を相の間(石の間)でつなぐ様式は、平安時代末期ごろに成立していたとされる。屋根の棟がたくさんあるため、「八棟造り」と呼ばれた。「八」は、数が多いことを表している。拝殿の屋根が拝殿と本殿の屋根につくりつけられてひとつつながりになった「両下」が、八棟造りの特徴。「権現造り」は、相の間の屋根が拝殿・本殿の屋根と別体になっているが、様式としては八棟造りから派生したものとされている。

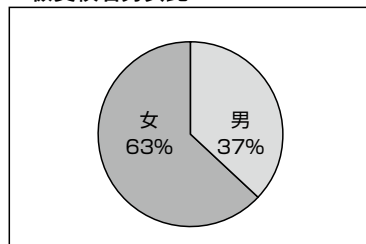
結果と受検者傾向



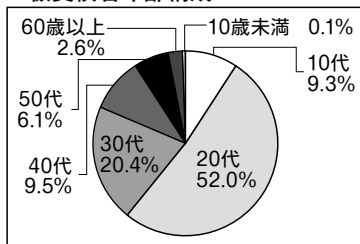
最高点	最低点	平均点	認定点
98.0	18.0	53.5	56.0

受検者	認定者
1474人	622人

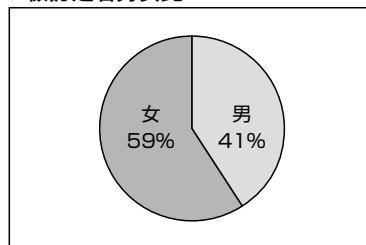
2級受検者男女比



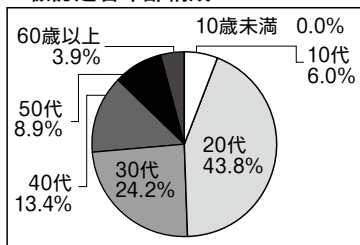
2級受検者年齢構成



2級認定者男女比



2級認定者年齢構成



2級問題の特徴 ~歴史や地理など周辺領域の知識から世界遺産の価値を問う~

今回の2級問題は、基礎知識に加え「国際的視野を持つ」ことを重視し、歴史や地理、建築様式など周辺領域を通じて遺産価値を問う出題が中心となりましたが、この傾向は2008年に検定制度が新しくなって以降、変わりありません。図表や地図の選択や、会話文、手紙文というスタイルの問題も出題されました。

正答率の高かった問題は、白川郷の家内制手工業について、知床で行われているエコツーリズムについて、ソックラム フルグク サの韓国石窟庵と仏国寺建立の経緯についてなどでした。一方で正答率の低かった問題は、紀伊山地の大峯奥駈道について、きいさんち おおみねおくがけみちのシヨパンの作品について、トゥーゲントハート邸の設計者についてなどでした。

2010年春発行の『世界遺産検定公式ガイド300』をテキストとする2回目の検定となりましたが、この書籍から全得点の約9割が出題されています。

認定基準 ~前回より3点低い56点。難易度はほぼ同じ~

本来の2級の認定基準である正答率6割(60点)以上の合格者が、全体の40%にわずかに達しませんでした。そのため、上位40%の受検者が認定となるよう基準調整が行われ、4点低い56点が認定基準となりました。前回2級の認定基準59点より3点低いですが、難易度としては前回とほとんど変わらないといえます。

受検者・認定者の傾向 ~女性、20~30代の割合が高い。認定率は30代以上が高い~

2級の受検者は、性別では女性が6割を超え、年齢別では20代と30代で7割を超えています。これは海外旅行への高い関心をもつ層と重なります。

性別や年齢別の構成は、受検者と認定者で大きな違いはありませんが、10代と20代では受検者の割合に比べて認定者の割合が若干下がったのに対し、30代以上で、特に40代で上がっています。この傾向も前回と同じです。

2010年 新規登録物件

2010年は、新たに21件(文化遺産15件、自然遺産5件、複合遺産1件)の世界遺産が誕生しました。

● ディライーヤのツライフ地区(サウジアラビア) [文化遺産] (iv)(v)(vi)

[At-Turaif District in ad-Dir'iyah]

アラビア半島の中央、リヤドの北西に位置するディライーヤは、15世紀に建設されたサウード王朝最初の首都でした。18～19世紀初頭にかけてこの地の政治的・宗教的役割が増大していくとともに、ツライフ地区の城塞は、サウード家の権力の中心地となり、そしてワッハーブ派によるイスラム教の改革運動拡大の拠点となっていきました。この物件には数多くの王宮遺跡、そしてディライーヤ・オアシスのほりにつくられた都市も含まれており、アラビア半島中央部独自の建築様式、ナドジ様式を見ることができます。

● オーストラリアの囚人関連遺跡群(オーストラリア連邦) [文化遺産] (iv)(vi)

[Australian Convict Sites]

この物件は18～19世紀、大英帝国によりオーストラリアにつくられた1,000以上の刑場のうち、11の施設から構成されています。これらは肥沃な海岸線につくられましたが、おもにシドニー周辺とタスマニア島、そしてノーフォーク島とフリーマントルでは、刑場を含む植民地の拡大がアボリジニとの間で大きな衝突を生みました。刑場は、イギリス本国の法廷で植民地への流刑が言い渡された、女性や子どもを含む数万人を収容しました。懲罰としての収監と、植民地開拓のための労働を通しての更生という2つの観点から、それぞれの施設には固有の役割がありました。この物件は、西欧諸国による大規模な囚人流刑と、その労働力を使った植民地拡大政策を今に伝える最大の例証といえます。

● ビキニ環礁——核実験場となった海(マーシャル諸島共和国) [文化遺産] (iv)(vi)

[Bikini Atoll Nuclear Test Site]

ビキニ環礁は太平洋の島嶼国、マーシャル諸島初の世界遺産となりました。第二次世界大戦直後、アメリカは1946～58年にかけて、ビキニ環礁で67回の核実験を行いました。ここには1946年の核実験で沈没した船が環礁の底に横たわり、1954年の水爆「ブラボー」によってできた直径約2kmのブラボー・クレーターが残るなど、核実験の威力を今日まで伝えていきます。この1954年の水爆実験では、日本のマグロ漁船、第五福竜丸も被曝しました。累積すると広島に投下された原爆の約7,000倍におよぶ威力の核実験は、ビキニ環礁の地質、自然環境、生態系、そして被曝した人々の健康に多大な被害をもたらしました。その脅威はいまだ過ぎ去ってはいません。「平和」や「地上の楽

園」といったイメージに反して、ビキニ環礁は「核の時代」の幕開けを象徴する地なのです。

● カミノ・レアル・デ・ティエラ・アデントロ——メキシコ内陸部の王の道(メキシコ合衆国) [文化遺産] (ii)(iv)

[Camino Real de Tierra Adentro]

カミノ・レアル・デ・ティエラ・アデントロはメキシコ内陸部のかつての王立道路で、「銀の道」という名でも知られています。今回登録されたのは、メキシコシティから北へ、アメリカのテキサス州とニューメキシコ州に続く全長2,600kmの道のうち、1,400kmにおよぶ区間にある55の遺跡と、5つの既存の世界遺産登録物件です。16世紀半ばから19世紀にかけて使用されたこのルートは、おもにサカテカス、グアナフアト、そしてサン・ルイス・ポトシなどの銀山で産出された銀や、ヨーロッパから輸入された水銀の輸送路でした。このルートを開拓し整備したのは鉱業発展のためではありませんが、とりわけスペインとアメリカ先住民との間で、社会的・文化的・宗教的つながりを生むためにも好都合だったのです。

● ハノイ——昇龍(タン・ロン)皇城遺跡の中心地(ベトナム社会主義共和国) [文化遺産] (ii)(iii)(vi)

[Central Sector of the Imperial Citadel of Thang Long - Hanoi]

11世紀にベトナム李王朝により建設されたタン・ロン(現ハノイ)の皇城は、大越国の独立を証言するものです。この物件はハノイの紅河デルタを埋め立てた干拓地にある、7世紀に中国が建造した要塞遺跡の上に建設されました。この地は1,300年間絶えることなく、政治の中心地であり続けました。皇城の建物と18番ホアンディウ考古遺跡には、紅河下流渓谷部における、北からの中国文化と南からのチャンパー王国文化が融合した独特の文化がよく表れています。

● 司教座都市アルビ(フランス共和国) [文化遺産] (iv)(v)

[Episcopal city of Albi]

フランス南西部、ガロンヌ川支流のタルン川沿いに位置する古い都市アルビは、ボン・ヴィユー(古い橋)やサン・サルヴィ教会(10～11世紀)をはじめ、中世における建造物と都市の発展を今に伝えていきます。13世紀に入り、キリスト教の異端とされたカタリ派(アルビジョワ派)の拠点のひとつとなりましたが、1209年、教皇庁の支持のもと、フランス王フィリップ2世は「アルビジョ

